HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	留学生と日本人学生の「交流」を考える ： 「ホリデーイン日高」2010活動報告
Author(s)	青木, 麻衣子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 14, 33-49
Issue Date	2010-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46741
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISC14_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第14号　(2010) [実践報告]

留学生と日本人学生の「交流」を考える
—「ホリデーイン日高」2010活動報告—

青　木　麻衣子

要　旨

近年、キャンパスの「国際化」に伴い、大学では適切な情報の提供および共有が求められている。留学生・日本人学生の交流も、お互いをよく知り摩擦を避ける上では大変重要だと考えられるが、GPA制度の導入や授業時数確保を求める政策動向から、授業以外でそのような場を確保することが難しいのが実情である。本稿は、北海道大学国際本部留学生センターが、外国人留学生・研究員およびその家族を対象に毎年企画・実施している「ホリデーイン日高」という一泊二日の宿泊行事に、今年度（2010年度）初めて日本人学生11名にボランティア・スタッフとして同行してもらった記録および彼・彼女らの体験談を、活動報告としてまとめたものである。留学生・日本人学生の効果的な「交流」とは何か、またそのためにどのような「きっかけ」が必要か、活動を通して考えてみたい。

〔キーワード〕留学生と日本人学生との交流、国際交流、地域交流、留学生支援

1. はじめに

中曽根内閣時代に発表された「留学生10万人計画」が2003年に達成されて以降、近年、私費留学生を中心に、その急増が著しい[1)]。2005年には総務省により「10万人計画」の総括がまとめられ、その提言を受ける形で2008年には「留学生30万人計画」が発表された。現在、各大学は、少子高齢化という社会背景とも相まって、そこで掲げられた「2020年までに留学生総数を30万人にする」との目標を達成するべく、留学生の獲得に努めている。

留学生の受け入れには、当然、その支援体制の整備が必要とされる。また、国際的な潮流を受け、英語のみで教育・研究を遂行するコースの設立も進められ、かつ奨励されているが、日本語能力を必ずしも要求されない

留学生の受け入れは、事務文書等の（日・英）二言語化をはじめ、各大学に様々な「変革」を要求している。

元来、他国に比べ国費留学生の割合が高く、留学生の受け入れを「支援」の一環と見なす傾向の強い我が国において[2]、国・地方公共団体および大学が、彼・彼女らにどこまで支援を提供すべきなのか、また提供すべきでないのかに、明確な境界線を引くことは難しい。「留学生30万人計画」でも、留学生の受け入れ環境づくりの推進が必要だと指摘されているが、その内容は、宿舎や奨学金の整備、日本語教育の充実等、未だハード面に留まる傾向が強く、留学生の受け入れによるキャンパスの「国際化」やそれに伴う交流・摩擦の発生等を想定したソフト面での支援の必要・充実は、実際、各大学の力量に任されている。

また、国際交流活動を主目的とする団体も、「外国・外国人との相互理解の促進・深化」を重視しているとは言うものの[3]、その多くが「国際協力」に関わり、主に「国際理解」や「活動サポート」等を実施していることから、双方向の「交流」を想定した取り組みを実践することがいかに難しいかをうかがうことができる。さらに近年では、ＧＰＡ制度の導入や授業時数の確保徹底を求める政策動向等により、留学生・日本人学生ともに、そのような活動に参加すること自体も難しくなっている。

これらを総合すると、①留学生数の増加に伴うキャンパスの「国際化」に際し、適切な情報の提供・共有が必要であるとの前提があるにもかかわらず、②それを促進するだろう「交流」活動の推進は困難であるとまとめることができる。このような状況を打開することを目的に、最近では、主として授業により留学生・日本人学生の交流の機会を意図的に作る試みも多数行われているが[4]、授業では「評価」が必要とされるため、せっかくの交流がその後に繋がらない等の問題もある。

そこで、北海道大学（以下、北大）国際本部留学生センターでは、毎年実施している留学生を対象とした宿泊行事「ホリデーイン日高」に、今年度（2010年度）、初めてボランティア・スタッフとして約10名の日本人学生を受け入れ、授業とは異なる「交流」の場を意図的に設定することを試みた。本稿では、その内容を紹介するとともに、特に彼・彼女らの体験談から、キャンパスの「国際化」が急速に進展する今日、留学生・日本人学生にとってどのような「交流」が求められているのかを考えてみたい。

2. 「ホリデーイン日高」とは

「ホリデーイン日高」は、北大留学生センターが国立日高青少年自然の家（以下、自然の家）と協同で企画・実施する年間行事の一つである。日高町の協力により、毎年７月下旬最終週の土日に同町で開催される「日高樹魂まつり」に参加し、留学生に日本の祭り文化を体験させることを主な目的とする。北大に所属する留学生、研究員はもちろんのこと、他の公的大学行事とは異なり、その家族も参加できる。

大学からバスで移動し自然の家に宿泊することから、参加者一人あたりが負担する経費は、旅行保険も含め2,000円弱である。また、留学生センターの行事であることから、募集通知、当日の案内、祭りの説明等に至るまで、すべて日本語・英語の両言語で行われる。さらに、アレルギーや宗教上の理由等で留学生が口にできないものも事前に確認し自然の家と調整する等、できる限りの対応も心がけている。

このような行事の性格は、①留学生のほとんどが大学院生であり[5]、②家族とともに生活する者も多いという北大留学生の全体的特徴[6]や、③日本語を学習・研究上必要としないコースを運用している[7]との大学の事情にも合致し、多くの留学生の参加を導く要因となっている。留学生の多くは、日本語・日本文化や日本人・日本社会との交流に少なからず興味を示しているものの[8]、実際に普段は勉強や研究、アルバイト等でその時間を十分にとることができない。また、幼い子どもを持つ留学生にとっては、子どもと一緒に安心して参加できる一泊二日の宿泊行事は大切な家族サービスの機会でもある。

一方、日高町にとっても、北大留学生の参加は、祭りの活性化という点で利点がある。単に参加人数が増えるというだけではなく、留学生によるステージ・パフォーマンスや、留学生チームによるレースへの参加等、毎年、地元の方々が楽しみにされる催しもある。特に前者は、民族衣装をまとった留学生が自身の出身地の歌やダンスを披露する等、外国人による文化紹介に触れる機会にもなっている。

さらにこの行事は、このような「文化交流」だけではなく、留学生にとってはある意味日本特有とも言える「集団生活」を体験する機会にもなっている。自然の家への宿泊は、留学生に、朝の集いで集合し、全員で整列してラジオ体操を行う、食事の後は自ら食器を片付ける、布団をたたむ等の経験を提供する。また、家族以外は基本的に大部屋で宿泊を共にせざるを

得ないことから、普段の大学生活のなかでは難しい学部・研究科の枠を越えた友人を作ることもできる。

しかしながら、①留学生のみを対象に募集する行事の意義・限界や、②特に日本語を必要としない留学生数の増加と彼・彼女らへの連絡事項の周知の徹底および安全の確保等を考慮し、今後、その内容に見直しが必要だと考えられてきたことも事実である。これまでも留学生数の増加に伴い、例年２～３名の日本人学生もしくは留学生をボランティア・スタッフとして雇用し、円滑な行事の遂行に努めてきた。しかし、２～３名の動員では日本人学生・留学生の間に「交流」を生むきっかけを提供せず、両者の関係はあくまでも「運営スタッフ」と「参加者」といったものに留まらざるを得なかった。留学生センターでは、これまでの経験を生かしつつ、「ホリデーイン日高」を「交流」行事の一環に位置付ける試みとして、今年度は、自然の家および日高町の同意・協力を得て、日本人ボランティア・スタッフを約10名に増員し、プログラム自体の組み直しを行った。

3. 「ホリデーイン日高」2010 活動内容

3.1 実施までの道のり

例年、「ホリデーイン日高」の参加者募集は、その約１ヶ月前に始められる。留学生センターの事務組織である国際支援課担当者が日・英両言語でポスター（図１）を作成し各部局に配信するとともに、留学生センター・ホームページおよび掲示板に掲示する。それを見た参加を希望する留学生は、留学生センター１階国際支援課カウンターにて、各自申し込みを行う。その際、国際支援課担当者が、食べられないもの、ステージおよびレースへの参加希望の有無を確認する。

図１　参加者募集ポスター（日本語）

今年度は、自然の家での受け入れ可能人数、引率教職員数等を考慮し、最大定員125名を募集した。昨年度は、新型インフルエンザ等の影響で応募者

数自体が少なかったが、今年度は募集締め切り前に定員が埋まるほど盛況であった。そのため、留学生によるステージ・パフォーマンス希望者、レース参加希望者も多く、前者は辞退者を募るとともに、後者はくじ引きにより参加者を決定せざるを得なかった。

その後、留学生センター教員は、ステージ参加者との打ち合わせを行い、当日必要なものやスケジュールの確認等を行った。また、国際支援課担当者は、自然の家と連絡を取り合い、参加者の部屋割やスケジュールの最終確認、医薬品、タオル、水等、当日持参するものの確認・調達を行った。さらに、必要に応じて問題が生じた場合には、両者で協議・確認の場を持った。今年度は、例えば現地でのゴミ処理の方法等について事前に何度か話し合いを行った。

3.2 「ホリデーイン日高」2010 プログラム

表1は、「ホリデーイン日高」2010のスケジュールを大まかに示したものである。これまでは、先述のとおり留学生に日本の祭り文化を体験させること、国立日高青少年自然の家での団体行動を経験させることを主目的としてきたため、日高到着後は、基本的に自然の家職員に司会進行を委ねてきた。今年度もその姿勢に変わりはないが、自然の家職員には、事前に、日本人学生がボランティア・スタッフとして参加することを周知し、彼・彼女らを積極的に「活用」してほしい旨を断っておいた。

表1 「ホリデーイン日高」2010 スケジュール

【第一日目：7月24日（土）】

9：30	留学生センター集合
10：00	出発
12：30	国立日高青少年自然の家 到着
12：45	食堂にて昼食
13：30	出会いの集い・オリエンテーション
14：30	はっぴを着て踊りの練習（その後、バスで移動）
16：30	会場にて踊りながらパレードに参加
17：00	お祭り会場に到着・参加（各自、屋台にて夕飯）
20：30	花火
21：00	日高青少年自然の家へ戻り、入浴・自由時間後、就寝

【第二日目：７月25日（日）】

６：３０	起床、部屋の片付け・清掃（例年であれば「朝の集い」）
７：１０	朝食
８：００	クラフト体験ワークショップ
１０：３０	祭り会場へ移動、祭りに参加（各自、屋台にて昼食）
１２：００	留学生ステージ，各レース等に参加
１４：３０	別れの集い
１４：４５	出発
１７：３０	北海道大学　到着・解散

また、本来ならすぐに祭り会場へ移動する二日目の午前中にも、今年度は、日本人学生との交流という観点から、「クラフト体験ワークショップ」を組み込んだ。これは、もともと自然の家で提供されているワークショップのうちの一つだが、留学生・日本人学生がともに「作業」することにより、身振り手振りを含むコミュニケーションの媒介が必要となり、交流が促進されると考えた。

さらに、例年、留学生のみが日本語・英語の両言語で挨拶し、行事の始まりと終わりを告げる「出会いの集い」「別れの集い」でも、今年度は、留学生および日本人学生の双方の代表が、日本語・英語の両言語でスピーチを行うこととした。これは、日本人学生がこの行事のボランティア・スタッフであると同時に、あくまでも一緒に行事を楽しむ参加者であると印象づけることを意図したものであった。

4.　日本人学生との「交流」を目的とした新たな試み

4.1　日本人学生の募集と事前説明・研修会開催

日本人学生ボランティア・スタッフの募集は、留学生参加者の募集と同時期に、主として留学に興味がある学生が登録する「留学メール」を通して行った[9)]。募集通知には、「ホリデーイン日高」の簡単な説明とともに、留学生と交流したい人、将来留学を考えている人、多国籍な職場で働いてみたいという夢を持っている人、レクリエーション行事に興味のある人等、誰でも参加できることを書き添えた。また、「ボランティア」とはいえ、一泊二日の宿泊行事であり宿泊費や食費がかかることから、それらの実費をカバーする程度の謝金を支払えるよう手はずした。

応募の条件は、①北大生であること、②一回２時間程度の事前研修に参加できることの二つであった。また、言語能力については、行事に参加する留学生の状況を鑑みて、簡単な英会話ができた方がいいとの断りをしつつ、「コミュニケーションをしようという意志のある」ことを重視している旨、強調した。なお、募集定員は10名で、先着順で定員になり次第、応募を打ち切ることとした。

メールでの募集であったため学生の反応は早く、募集を開始してすぐに数名から問い合わせの返信メールが届いた。実際の実施日まで約１ヶ月しかない時期での募集だっただけに、すでにアルバイト等で都合がつけられなかった学生もいたが、最終的には11名の学生にスタッフとして加わってもらえることになった。11名のうち３名は大学院生、２名は学部３年生であったが、半数の５名が学部１年生であった（残り１名は学部２年生）。また、所属研究科・学部は様々で、理系・文系もほぼ半数ずつであった。

実施１週間前の夕方に約２時間行った事前研修では、はじめに、「ホリデーイン日高」について、その概要・目的を説明した。そして、日本人学生にこの行事のなかで心がけてほしいこととして、①留学生が十二分に祭りを楽しめるようサポートすること、②行事に参加する北大生の一人として、「国際交流」とは何かを考えることの二点を挙げた。

また、彼・彼女らの行事参加前の「留学生」のイメージを、ワークシートを用いて確認するとともに、北大の統計資料や留学生学生生活実態調査の結果から、北大の留学生の概要・特徴について説明した。その後、再びワークシートを用いて、留学生と日本人学生は何が違うのか、また「交流」を促進するために彼・彼女らには何ができるのか、「ホリデーイン日高」の参加に際し具体的に何を目標としたいかを考えてもらった。この日集まった日本人学生は、先に言及したように、学年ならびに研究科・学部もばらばらで、まさに初めて会う人達だったものの、主として大学院生のリードにより、すぐに打ち解けた様子が印象的だった。

研修では最後に、その前年の「ホリデーイン日高」の写真を見せ、当日の流れの確認、名札に記載する名前の確認等を行った。ボランティア・スタッフに応募した学生の中には、これまでにもこの行事に参加した経験を持つ学生も２名おり、衣類や持ち物についてのアドバイスや情報共有も行われた。

4.2 当日の役割分担

行事初日、日本人学生ボランティア・スタッフ、留学生センターおよび国際支援課スタッフは、受付開始45分前に留学生センターに集合し、まず、二日間のスケジュール、持ち物、役割分担等の確認を行った。今年度は、参加者数が多く、また初の試みとして日本人学生との交流を目的の一つに加えたため、全体を六つのグループに分け、それぞれに日本人学生（リーダー）を１～２名配置した。

各グループの名称は、りんご、みかん、ぶどう等、日本語の名前を持つ果物とし、グループのメンバーにはそれらの印が入ったバッジを配布して、鞄・洋服等よく見えるところにつけてもらった。出欠確認のための受付や乗車するバス、休憩後・出発前のバス内での人数確認、一日目の昼食、二日目のワークショップ等は、すべてこのグループを単位に行動することを基本とした。リーダーは、受付開始までの約30分間、「リーダー用しおり」（参考資料参照）に記載された備品等を確認するとともに、受付用テーブル等を設営し、９時半から受付を開始した。参加者はグループごとに受付をし、その後、各自、指定されたバスに乗り込んだ。

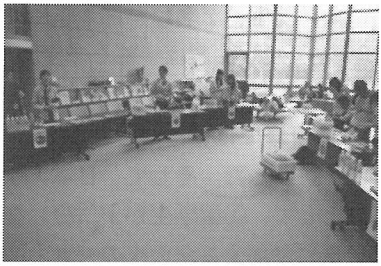

写真１　受付の様子

行きのバスの中では、日本人学生、留学生ともに緊張した面持ちだったが、マイクを回して自己紹介をした後、休憩を挟み、席を移動する等、日本人学生から積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。また、各バスに２グループずつ乗車したため日本人リーダーが１台のバスに３～４人同乗することになったが、各自で役割を分担し、休憩後の点呼や人数確認もスムーズに行うことができた。さらに、当日はあいにく雨で、「盆踊りパレード」には参加することができなかったが、待機中の車中では、リーダーが率先して歌で盛り上げる等、参加者を楽しませるための工夫も見られた。

また、祭り会場では、北大からの参加者全員が日高町より貸与されたはっぴに身を包み、かつ閉ざされた空間の中にいるため、情報伝達等が比較的しやすい環境にはあるのだが、自身も祭りを楽しみながら、同行した教職員の指示に従い、必要に応じて参加者に周知する等、ボランティア・スタッ

フとしての役割も十分に果たしてくれた。このような多人数が参加する行事では、クラフト体験等でもそうであったが、一度に指示が伝わりにくいとの難点がある。また、日本語・英語の二言語による伝達は、概して人々の集中力を削ぐものである。日本人学生の協力は、そのような欠点を補うと同時に、結果的に、彼・彼女ら自身の目的でもある留学生との「交流」を、教職員との媒介役として、また作業を通して促進する契機となった。

写真2　クラフト・ワークショップ

当初、筆者らは、日本人学生ボランティア・スタッフの半数が1年生であったことを考慮して、「リーダー用しおり」には、留学生とのコミュニケーションの「きっかけ」を与えるヒントをいくつか含ませておいた（参考資料参照）。しかし、実際には、こちらの心配をよそに、日本人学生の多くは自ら積極的に留学生に話しかけていたようである。もちろん、留学生・日本人学生ともにそれぞれの性格や普段とは異なる環境等により、すべての参加者が十分な交流を行えたとは言えないだろう。しかし、帰りの車中での日本人学生リーダーからの挨拶に、留学生から自然と拍手が沸き上がったこと、また、留学生センター到着後も日本人学生同士がしばらくとどまり行事の内容を振り返っていたこと等を考えると、課題はあるとはいえ、当初の目的はおおかた達成できたと言えるであろう。自然の家での宿泊に際しての部屋割も、家族以外の参加者は、留学生・日本人が混ざるように工夫したが、筆者らの窺いしれないところで、学生同士のみでの交流も持てたようであった。

4.3　日本人学生からの感想・意見等

「ホリデーイン日高」実施後、筆者らは、参加した日本人学生がこの体験から何を学び、何を考えたのかを検討し今後の活動に生かすため、学生に「活動後レポート」をまとめ、提出してもらった。レポートでは、事前研修で聞いた「留学生」のイメージについて、行事参加後にそれが変わったかどうか、また自身が立てたこの行事における目標が達成できたかどうかを確認した。さらに、来年度以降への参考として、この行事に対する感想と改善すべき点・気付いた点等も記入してもらった。以下では、それら

三項目それぞれについての学生の意見を紹介する。

4.3.1 行事参加後の「留学生」のイメージ

「ホリデーイン日高」に参加した日本人学生が行事参加以前に持っていた「留学生」に対するイメージは、「単独（一人）で日本に来ている」「中国・韓国出身者が多い」「自分と同じぐらいの年齢の学生が多い」「日本語を勉強して、日本文化に興味を持っている」という、いわゆる日本人が抱きがちな外国人大学生像であった。しかし、実際に行事に参加する留学生との交流により、家族で滞在している留学生も多くいること、そのため年齢も様々であること、単に留学生と言っても様々な目的を持ち、その出身地も多様であること等、自分が持っていた留学生像が単なる「イメージ」に過ぎないことに気付いたという。

また、学生のなかには「留学生はみなコミュニケーションが得意というイメージを持っていたが、苦手な人もいて、何とか伝える努力をしていることがわかった」、「当初は専門的な勉強をするために日本に来ているので、日本人や日本語にあまり関心がないのかと思っていたが、二日間の交流を通じて、留学生がどのイベントにも積極的に取り組んでいるのを見て、とても親しみが湧いた」と答えた者もあった。彼・彼女らにとってこの行事への参加は、留学生も自分達と同じ学生であり、身近な存在であると認識する契機になったようである。一方、少数意見ではあったが、「留学生」というくくりではなく個人という単位で相手に接しているので、「留学生」に対するイメージに変化はないと答えた学生もいた。

4.3.2 自身の立てた目標の達成度

レポート全体をとおして指摘できることだが、この行事・活動に対する学生の満足度は、非常に高い。先に言及したとおり、日本人学生の中には過去にもこの行事に参加した経験を持つ者がいた。しかしその学生も、今回が「一番留学生たちと関わり合うことができた」との感想を寄せている。また、普段大学にいるときにはなかなか留学生と交流する機会がないため、このようにたくさんの留学生と話す機会を持てたことはとてもいい経験になったとの声も複数聞かれた。

学生の多くは、この行事・活動に参加する際の目標として、「積極的に留学生とコミュニケーションをとる・交流する」ことを掲げていた。なか

には、「全員の名前を覚えることは難しかったが少なくとも話はできた」「多人数の人と一緒に話をするということがなかなかできなかったが、一人ずつとじっくり話すことができた」との感想もあった。しかしこれらの反省も含め、ほぼ全員が「積極的に話をすることができた」「友達ができた」ことで、先の目標は大方達成できたと見なしていた。

ただ、話をする「きっかけ」として、留学生の出身地や祭会場である日高について等、共通の話題となる情報が事前にあった方がよいと考えた学生も多かった。その点で、盆踊りの練習やクラフト体験等の「共同作業」はよかったとの感想もあったが、今後、意図的かつ効果的な「しかけ」について、考えていく必要があるだろう。

4.3.3 今後改善すべき点等

日本人学生から出された今後改善すべき点についての意見は、その多くが、各個別プログラム（内容）に対する時間配分や施設の使用等、プログラム自体の運営に関するものであった。留学生との「交流」については、上記した、「参加留学生の出身地についての情報が事前にほしい」「祭への参加だけでなく、一緒に野外炊飯やスポーツ等できればなおいい」との意見以外に、特段指摘はなかった。

5. おわりに

本稿ではこれまで、授業とは異なる「交流」の場を意図的に設定する試みとして、留学生センターの宿泊行事「ホリデーイン日高」の今年度の活動内容および日本人学生の体験レポートを紹介してきた。ここでは最後に、キャンパスの「国際化」が急速に進展する今日、留学生・日本人学生にとってどのような「交流」が求められているのかを考えてみたい。

まず、留学生・日本人学生の「交流」には、意図的な介入が不可欠であることを指摘しておきたい。これは、交流の時間がなかなか持てないとの物理的要因も然ることながら、特に日本人学生が持つ「留学生」に対するイメージにも起因している。この行事に参加する前後で日本人学生が抱いていた「留学生」に対するイメージには、少なからず変化が見られた。相手を知ることは、相手との距離を縮めることに繋がる。意図的な介入は、相手を知る機会を提供するために重要である。

ただ、その介入が、「すべて用意された」ものであってはならないこと

にあわせて注意する必要があるだろう。「ホリデーイン日高」では、今年４月に入学したばかりの１年生が日本人参加学生の半数を占めたため、「リーダー用しおり」には「交流」のためのヒントを所々散りばめておいた。しかし、それらのヒントに頼らずとも、彼・彼女らは積極的に留学生に話しかけ、盆踊りの練習やクラフト体験等の共同「作業」を、率先してリードしていた。

ここから、効果的な「交流」の促進には、意図的な介入は必要不可欠であるものの、学生の自主性を尊重し、彼・彼女らが自らの能力を発揮できる場を提供することが重要だと指摘できる。ただ、今回は「留学メール」を通しての募集であり、もともと国際交流や留学に興味のある学生が参加していたとの想定も可能であることから、学生の自主性・積極性、リーダーシップをいかに涵養していくかは今後、あわせて考えていく必要があるだろう。

付記

「ホリデーイン日高」は、北海道大学国際本部留学生センター指導部（髙橋・青木）および国際支援課、国立日高青少年自然の家が協同で実施しています。ボランティア・スタッフとして参加した日本人学生および日高町のみなさまには、多大なご協力をいただきました。ありがとうございました。

注：

1）総務省「留学生の受け入れ推進施策に関する政策評価（政策の総合性を確保するための評価）」資料、2005年、p.1. なお、この報告書によれば、2000年ごろから留学生総数の急増が見られる。

2）同上、p.2. なおここで示されている数値によれば、留学生数に占める国費留学生の割合はアメリカが190人に１人、イギリスが60人に１人、オーストラリアが40人に１人なのに対し、日本は11人に１人である。

3）国際交流基金「国際交流活動団体に関する調査報告書概要」2006年、p.5.

4）例えば、論文検索エンジンCiNiiで「留学生」「日本人学生」「交流」をキーワードに検索しても、授業を通しての交流活動に関する研究・

報告が多数存在することがわかる。

5）北海道大学『北海道大学概要2010-2011』2010年、pp.31-32.

6）なかには日本には単身できている学生もいるが、既婚者の割合は理系・医系で高い。（北海道大学留学生センター留学生指導専門委員会『北海道大学留学生学生生活実態調査報告書』2009年、pp.15-16.）

7）現在北大には、英語のみで入学・修了できるコースが五つある。

8）北海道大学留学生センター留学生指導専門委員会『前掲書』2009年、p.71.

9）留学や国際交流に興味のある学生が登録し、国際支援課が発信する関連情報を受け取ることのできるシステムになっている。

参考資料：「ホリデーイン日高」2010　リーダー用しおり（スケジュール）

【第一日目：7月24日（土）】

	内　容	確　認　事　項　等
8：45	集合	・担当グループ・メンバーの確認 ・引率教職員・リーダー　ミーティング ・バス常備品の点検・確認 □酔い止め1箱 □テッシュペーパー1箱 □ポリ袋2枚 □ウエットティッシュ1箱 □ビニール袋1セット □手拭い ・各グループで参加者に配布する物の確認 □しおり □北大うちわ □水（500㎜ペットボトル）
9：30	グループごとに受付	※グループ分けの表を受付に掲示します。名前を確認し、グループごとに受付を済ませ、資料等を配布してください。人数が揃ったところから、トイレ確認等を済ませ、バスに乗って待っていてください。 ☆各バスでバス・リーダーなど役割分担を決めましょう！

10：00	北大　出発 【バス往路】 （途中、夕張ＰＡで休憩）	・必要事項説明 ・アクティビティ ☆車中で自己紹介をしましょう！ ☆留学生は日高に初めて行く人も多いです。日高について、何でもいいので紹介してください。 ※休憩後は、各役割分担に従って人数確認をしてください。
12：30	自然の家　到着	
12：45	昼食	グループごとに昼食 ※食事内容に十分注意してください。アレルギーや宗教上の理由により、食べられない物がある人もいます。 ☆同じグループのメンバーに「日本（食）で好きな食べ物」を聞いてみましょう。
13：30	出会いの集い オリエンテーション	・重要事項・今後の流れ　説明 ・国立日高青少年自然の家にご挨拶 ◇留学生１名（　　）さん ◇日本人リーダー１名（　　）さん ※日本人リーダーの挨拶は、日・英両言語でお願いします。
14：15	はっぴ配布 盆踊り練習	※はっぴの着付けを手伝ってください。 ※盆踊り練習時、積極的に踊ってください。
15：40	移動	
16：30	盆踊りパレード参加	※パレードに参加すると、お祭り会場で使用できる食券（３００円）が配付されます☺
17：30	お祭り会場へ 移動・参加 ・夕食 ・花火(20：30～)	各自夕食 ※なるべくグループで夕食をとるようにしてください。積極的にコミュニケーションをとってみましょう！ ☆同じグループのメンバーに「日本のお祭りフード」を、少なくとも三つ、説明してあげてください！ その後、自由行動

21：00 （予定）	自由解散後 自然の家へ	※「青少年の家」へ戻る留学生は必ずグループ・リーダーに一言声をかけてから帰るよう、徹底してください。 ※花火終了後、（人数確認を行った後）残っている留学生とグループごとに戻ってください。 その後、リーダー集合（明日の予定確認）
	入浴・就寝	※入浴時間（午後９時～午後１０時）

【第二日目：７月25日（日）】

	内　容	確　認　事　項　等
６：30	起床	
６：45	部屋片づけ・清掃	
７：10 ７：55	朝食 大研修室へ移動	各自バラバラにとる ☆留学生の言語で「おはよう」は何と言うのか、少なくとも３名の留学生に聞いてみましょう！
８：00	クラフト・ ワークショップ	各グループで、日高青少年の家の方のインストラクションに従って木工作業 ※日本語がよくわからない留学生への通訳・指示等お願いします。安全面にも十分配慮してくださいね。
10：15	荷物を持って バスへ移動 オリエンテーション	※お祭りでステージに参加するため衣装への着替えが必要な人には、「着替えてから」移動するよう伝えてください。
10：25	祭会場へバス移動	全員、バスで移動
10：30	祭会場に到着	
11：00	祭参加	※きこりさんレース、流走レースに出る人がいます。各参加者の誘導をお願いします。
12：00	留学生ステージ	※参加者の誘導・舞台裏でのお手伝いをお願いします。

14：30	別れの集い	・はっぴ回収 ・国立日高青少年自然の家にご挨拶 ◇留学生１名（　　）さん ◇日本人リーダー１名（　　）さん
14：45	自然の家　出発 【バス往路】 （途中、夕張ＰＡで休憩）	・必要事項説明（バス内にてバッジ回収） ・（みなさんが元気そうなら）一言反省会 ☆反省会は臨機応変、実施してください。 ※休憩後は、各役割分担に従って人数確認をしてください。
17：30	留学生センター到着	※全員降車後、忘れ物がないか等確認をお願いします。 おつかれさまでした☺

※…注意事項，☆…「交流」のためのヒント

あおき　まいこ（留学生センター講師）

【Report】 Activity Report on 'Holiday in Hidaka 2010'

Maiko AOKI

The aim of this paper is to report on an overnight domestic trip 'Holiday in Hidaka 2010' which was jointly held by the International Student Center (ISC), Hokkaido University, and the National HIDAKA Youth Outdoor Learning Center. Although 'Holiday in Hidaka' is one of the annual events only for the international students and their families mainly in order to give them some experiences of Japanese Matsuri (festival) culture through participating a summer festival in Hidaka town, 'Hidaka Jukon Matsuri', Japanese students were also allowed to join this 2010 event to facilitate interactions and communications between the international and Japanese students. Both groups of students are interested in and are willing to have exchange activities to know each other, but in fact they do not have many opportunities and time to do so. Therefore, we tried to re-organize this 2010 event to meet their demands and considered what aspects were needed to promote and enhance effective interactions between the international and Japanese students for further activities.